根本幸夫他著『陰陽五行説・その発生と展開』

陰陽説は自然の変化を説明する理論として興り、陰陽五行説は陰陽説を発展させて自然の変化に応じた為政を説く政治思想としてスタートした。これが後に人間を含めた世界を解釈する公式へと転化するが、この転化に関った者の中に医家や方士がいた。世界解釈の公式としての地位を漢代に確立した陰陽五行説は以後二千年に亘って中国人の思考法を律し続け、その影響は日本・韓国など東アジア諸国にまで及んだ。このような陰陽五行説は当初の関り以降、中国伝統医学に深く関与し続けた。監修者は前言において中国伝統医学に対する科学的アプローチとともに陰陽五行説の見直しを提唱する。中国伝統医学の歴史を振返る時、至言というべきであろう。

本書は第1章　陰陽五行説誕生前夜、第2章　陰陽論の発生と展開、第3章　五行説の発生とその展開、第4章　陰陽論と五行説の結合、第5章　治療基礎理論としての五行説、第6章　五行説の鍼灸治療面への影響、第7章　五行説と色体表、第8章　陰陽五行説の各界への影響、第9章　陰陽五行説の現代的意義、から成る。大別すると、陰陽五行説一般を主とする第1〜3章および8・9章と、中国伝統医学における陰陽五行説を主とする第4〜7章に分けることができる。

第1〜3章は従来の研究成果を広く踏まえて初期の陰陽五行説の問題点を列挙し論及する。著者にとって専門外と思われる中国哲学・中国思想の領域ではあるが、問題の核心をよく捉え、記述も全般的に妥当である。例えば従来はあまり取り上げられなかった陰陽主運説を一項目として立てている所などに著者のこの主題に対する見識が窺われる（陰陽主運説の内容について島邦男氏の誤りのある所説を無批判に引用する点に問題がないわけではない）。

一方、第1〜3章全体を通じて中国古典を扱う際に留意すべき基本的配慮を欠く点がいくつか見られる。例えば第1章冒頭の「中国における最も古い神は『書経』によれば盤古である」は、『書経』を『三五歴記』に改めなければならない。正確な典拠は中国古典を扱う場合に最重要視される案件である。

古典の読み方にも問題点が見られる。例えば第2章に『荘子』天下篇の一文を「易は以て陰陽の道なり」と引用する（53頁）。これは「陰陽を道（い）う」或は「陰陽を道（みちび）く」と読むべき所であり、『易』と陰陽の関係を論ずる記述として見過せない誤りである。紙幅の制約上それぞれ一例を挙げるに止めるが、典拠と読みは論述の是非に関る極めて重要な事柄で決して忽にすべきではない。全くの憶測だが、恐らく著者には中国古典に対するかなりの自信があって、これが却って災いしているのではあるまいか。今後の著作においては慎重な配慮が望まれる。

第4～6章において鍼灸部門が中心となる傾向はあるものの、湯液部門の知見を可能な限り交えながら中国伝統医学全般における陰陽五行説の意義について論述しようとする著者の姿勢は高く評価すべきである。著者の専門分野のためか記述はより詳しく、問題点も比較的少ない。しかし、例えば第5章で「子午流注逐日按時定穴の歌」の作者を南斉の徐文伯とするものなどにやはり典拠の問題を残している（163頁）。また第4章の5（117～119頁）において『傷寒』『金匱』は陰陽説が主で、五行説は付足しのような記述が見られる。これは我国の湯液家に多く見られる見解でもあるが、「陰陽五行説を見直す」との方針であるならば多少とも異なる視点からの論及がなされても良かったのではなかろうか。後漢以降、中国人の思考において陰陽と五行は表裏一体の関係にあり、陰陽と言えば文字面での有無を問わず必ず五行を含意し、その逆もまた然りという状態であった。本書にはないが、『傷寒』『金匱』の五行的記述は後世の竄入であるとする説は陰陽五行思想史的には成立に困難を伴う。後代の理性から見ると陰陽五行説には理解し難い部分が確かに存在する。だからと言ってそれを排除することは性急に過ぎはしまいか。五行的記述が存在することで『傷寒』『金匱』の価値が減ずることは皆無である。陰陽説に限定することなく、陰陽五行説全般の視点から『傷寒』『金匱』の理解が必要と考えるものである。

些か本稿の主題から外れてしまったので話を本書に戻せば、上述のような長所と短所を併せ持つ書であることを理解して読むならば、陰陽五行説に関する概説書として中国伝統医学関係者のみならず、広く陰陽五行思想に興味を抱く人々にとっても十分に有益な書であるに違いない。

（林　克）

〔薬業時報社・東京都千代田区神田神保町二―三六北神ビル、電話〇三―三二六五―七七五一、一九九一年七月一〇日発行、A5判、全二九七ページ、定価三九八〇円〕

中原泉　訳

『人体構造論抄 ―ヴェサリウスの the Epitome―』

これは、ヴェサリウスの有名な解剖書（通称 *Fabrica*）の彼自身によるダイジェスト版（通称 *Epitome*）を、部分訳した本である。凡例には、英訳版を参考にしつつも「可及的に原文のラテン語に則して訳した」とある。なぜ副題に敢えて英語の定冠詞 the を添えたのであろうか。訳者は日本歯科大学学長で本学会評議員である。昨一九九三年が *Fabrica* と *Epitome* の初版刊行四五〇周年だったことから、それを記念し、ヴェサリウスを顕彰するという意図をもって、この訳書を出版されたようである。原典の目次や内容なども紹介したいところであるが、字数制限のため割愛し、以下、この訳書を忌憚なく批評させて戴く。

率直にいって、本書には初歩的な誤訳が多い。例えば、「瞼の靱帯」（一四頁）、「頭の気管」（一一頁）、歯は上下とも「たい